藤井高尚の枕冊子研究について

柿谷雄三

一

松斎藤井高尚に「枕冊子新釈」なる著述があるということは、高尚自ら、「三のしるべ文下」や「清少納言之碑詞」に記しており、文政七年刊の「文あはせ下」の奥附にある「松乃屋藤井高尚大人著述目録」にも、「枕草紙新釈　十二冊」と記されているところから、はやくその名が知られていたのであるが、実際に存したのかどうかは、岡本保孝も「枕草紙存疑」で疑い[注一]、また大津有一博士の『枕草子註釈書覚書』（「文学」昭和九年一月号）にも、「今何れに伝へられてゐるものか未だ管見に上らない。」としておられるように、全く不明であった。ところが近年、岡山の吉備津神社から、「藤井高尚全集　第一巻」が刊行され、（昭和二十五年三月刊）、その中に堀家吉次郎氏（堀家氏は高尚の養孫高雅の縁者の家すじという。）所蔵の「清少納言枕冊子新釈　一」が入れられるに及んで、その一斑を窺うことができるようになった。

ところで、この書は全集の凡例にも記されているごとく、高尚の自筆稿本ではあるが、「処々に貼紙もし、欄外に書き足しもし、未だ決定稿に至ら」ないもののようであり、その第二冊以下については、その所在も、存否も、依然としてわからないのである。

さらに、国語国文学研究史大成6「枕草子　徒然草」（昭和三十五年一月三省堂刊）には、岸上慎二博士によって、博士ご所蔵の武藤元信旧蔵の藤井高尚書写本かと思われる枕冊子五冊本が紹介されて、高尚の枕冊子研究の輪郭が次第に明らかになってきた。すなわち、その第一冊の表紙の見返しには、

「延徳本といふは直綱亀山氏之蔵にて奥に延徳二庚戌五月下旬写之畢とあり又右之本は三井寺正般筆跡也とあり此枕冊子にくれなゐして所々かきいれたるは、加藤千蔭のもたるふるきうつしまきを、清水浜臣の写したるを、又うつしたる也。あゐして古本としるしたるは、故奈佐久左衛門日下部勝皐（シケ）といふ人の、つたへもたりしいとふるきうつしまきを、屋代太郎弘賢のうつしおかれたるをかりてものせし也。古一本としるせるは同じ奈佐氏の本を、検校塙保己一の人にうつさせおきたるをかりてよみあはせてしるせし也。此ふたつはまたく同じかるべきことわりなれど、うつすたひ〳〵にかきあやまるものにしあれば、かたみによきあしき事の有なり。古本と有本とまたく同じき所は古本のかたをしるせり。大江戸の神田の仲町といふ所なる足立屋にやどりをりて、河本宣易とゝもによみあ

はせてものしたるになむ。

文化元年九月八日　　藤井高尚　」

とあって、文化元年九月、高尚は江戸に出て、（吉備津神社編「藤井高尚伝」の年表によると、享和三年（一八〇三）（四〇歳）のころから、吉備津宮と板倉家との間の訴訟事件のため、江戸に長く滞在、翌文化元年には江戸にいたことはたしかである。）河本宣易とともに、神田仲町の足立屋という宿で枕冊子の諸本を校合していることがわかるのである。わたくしも、先日この本を拝見する機会を得、岸上博士からいろいろと、ご示教を賜わることができた。この写本は、清水浜臣の注の書入とくわしい本文校合とが色を変えてなされており、博士も研究史大成に記しておられるごとく、枕冊子新釈に採用した本文のよりどころをしることができる貴重な文献である。[注二]

さて、文化元年といえば高尚四十一歳の時[注三]であり、枕冊子の研究はその後ずっと続けられていたらしく、文化八年刊行の「おくれし雁」の奥に付された明学堂和書目録（国学書林恵比須屋市右衛門―城戸千楯―）には「枕草子新釈」の名が出てくるのである。すなわち、

松屋大人著

同（枕草子）新釈　追彫　全部五冊

此書は至て正しき古本をもって校正し

先釈の是非を論じ、新なる考を挙たる書也

とあって、書肆の目録とはいえ、江戸で整備した本文資料をもとにして、画期的な注釈を意図していたように見受けられる。さらに、六年後の文化十四年（一八一七）の秋、高尚は、奈良の大原民声の求めによって、「清少納言之碑詞」を記しているが、（「松屋文後集下」所収）

「然高尚枕冊子新釈登云書遠加伎著須止之弖此彼登古本等校合勢乎流頃斯母此碑乃詞遠登伊麻太相見努奈良人能乞於許勢多留波彼君乃霊能導歟止歓美歓美毛加伎記志都」（三十五オ）

といっていることによっても、その研究がかなり進捗していたらしく思われるのである。

ところが文政五年（一八二二）高尚五十九歳のころの書信には、

「枕冊子注釈書懸け有之候も、手及兼候而当時休み居候云々……」

（文政五年、閏正月十四日付書信。「国学者研究」所収）
（森繁夫氏「藤井高尚と清水宣昭」による。）

とある由であり、この仕事が多少難渋していたようにも見受けられる。さらに、前にもふれた文政七年十一月刊「文あはせ」の巻末所載の「松乃屋藤井高尚大人著述目録」の冒頭には「枕草紙新釈十二冊」として記されており、「明学堂和書目録」に予告されていた五冊とは冊数が多くなっているのである。思うに岸上博士所蔵高尚筆本（以下岸上本と略称する）は五冊（第一冊は春曙抄巻一、二、第二冊は同じく巻三、四、五、第三冊は同じく巻六、七、第四冊は同じく巻八、九、第五冊は巻十、十一、十二に相当する）であるが、最初その巻別にならって予定されていたものが、春曙抄の十二巻別によって出す計画に変更されたものなのであろうか。現存の「枕冊子新釈　一」はちょうど春曙抄巻一分に相当し十二冊として出版する予定であったかと推考される。

また、文政九年（一八二六）の秋の序を有する「三のしるべ　文下」には、

「此冊子（筆者注、枕冊子のこと）も板にゑりてすれる本みなわろく注もよきものはなし。さるからにおのれ江戸にてふるきうつしまきどもさがし出て、見わたし考へたゞしおけるに、注をものして枕冊子ノ新釈と名づけたるあり。世にひろめんとすれども、いまだきようがきをへず、おのが注釈を出さざるこなたは春曙抄といふ本を見るべし。」（四ウ）

と記しているが、これによると、草稿の一部は出来あがっていたようでもあるが、もとより出版の段階ではなさそうである。そしてまた高尚のこの注釈への並々ならぬ努力と、本文資料の十分でなかった当時の、研究のむずかしさを感じさせるのである。ちなみに「三のしるべ」は文政十二年に出版されているが、その奥にも「幸之倉和書目録」というのが出ており、「おくれし雁」の奥に附されていた目録と、まったく同一板木のまま（「追彫」の文字もつけて）「枕草子新釈」の名が記されているのである。

翌天保元年の夏には高尚は重病にかかり、その後健康を害しがちであったらしく、（「藤井高尚伝」による）著書も「松屋文後集」（天保三年刊）「源平拾遺」（天保七年刊）ぐらいしか出しておらず、招かれて講義に行くことはあったにしても、複雑な枕冊子の注釈を完成したかどうかは疑しい。その間の事情を物語るものとして、森繁夫氏が掲げられた次の二通の手紙の一節は、重要な意味を持っているかと思う。

「枕冊子新釈は先年二三冊も書掛候、其節目録には出し候得共、伊勢物語注釈と似たるもの故に先差置候に――遠遊にはか様の事埒明不申他出を止め申候て追々書立可申候云々」

（天保六年二月二十七日付書信）

天保六年といえば高尚七十二歳の年にあたるが、さらに三年後、死に先立つこと二年前の天保九年十四日付、清水宣昭宛消息の末には次のような記載があるようである。

「二陳、拙子も今少しの残生に候へば、志候もの可成出置候心に御座候

枕冊子春曙抄補正に、本文数本校合ノ是非ヲモ記

萬葉略解補正

此二ツ古今新釈ノ次ニ出シ候事

其次ニ

土佐日記考証補正

さ衣物語、古写本板本校合正本」

（いずれも「国学者研究」所収、森繁夫氏「藤井高尚と清水宣昭」によった。）

右の天保六年の手紙から推すと、「枕冊子新釈」は晩年において二、三冊（おそらく、現存の新釈につづく春曙抄巻二、巻三にあたる分）が脱稿していたようではあるが、執筆がとだえがちのようであり、天保九年三月十日、中風になった高尚は、その四月に弟子義門に枕冊子ならぬ「古今集新釈」の校訂を依頼しているから、宣昭への手紙にもあるごとく、まず古今集の注釈を先に出し、ついで枕冊子の注釈をと考えていたらしい。

さらに、もう一つ問題になる点は、天保六年の手紙に「枕冊子新釈」とあるのに、天保九年のそれに、「枕冊子春曙抄補正」と記している

ことである。これは「枕冊子新釈」のことを指しているのか、それとも別のものを指しているのか、再考の余地があるように思う。「枕冊子新釈」は前述のように、高尚が文化元年江戸に出て、本文校合を河本宣易とともになして、間もなく計画されたものであり、その後も、しばしば「枕冊子新釈」ということを著書やそれに附した目録、あるいは手紙の中に記しているのである。この場合だけ、「枕冊子春曙抄補正」としていることは、天保六年ごろまでに脱稿した「枕冊子新釈」二、三冊以外に、もっと簡単にした、長年の枕冊子研究を圧縮したもの――例えば春曙抄への書入浄書本のようなもの――を考えていたのではなかろうか。晩年の健康の衰えた高尚が、尨大な「枕冊子新釈」十二冊の完成をすくなくとも、天保九年九月という病中の時点において考えていたかは疑問であろう。

要するに、高尚の枕冊子研究は、文化元年四十一歳のころから（或いはもう少し以前からとも考えられるが）始り、七十七歳で亡くなる天保十一年ごろまで、ずっと続けられていたといえるのであり、その間、彼の代表的著述ともいうべき「伊勢物語新釈」に倣った意欲的な「枕冊子新釈」という著述十二冊（初めの計画は五冊であったらしい）が計画されたが、春曙抄本文を中心として、さほど優秀とも思われない二三の古写本類をもって校訂するという、今日から見ると、文献的に恵まれない状態での研究であったから、数々の壁にぶつかったものと想像される。かくて様々の困難をのりこえて、その結論には問題はあるものの、独自の校訂本文を立てた「枕冊子新釈」の二、三冊が完成したもののようである。その根幹となった最初の資料というか、研究覚え書ともいうべきものが岸上慎二博士所蔵の高尚筆写書入枕冊子五冊なのであろう。

二

さて、次に田中重太郎博士ご所蔵の高尚自筆書入枕草子春曙抄について触れてみたい。

本書は藍表紙の延宝二年初刷本枕草子春曙抄十二冊に、藤井高尚の自筆で克明な書入がなされている。すべて墨書であり、本文行間に細字の美しい字体で終始一貫して記されており、浄書本の感が深い。ただ惜しむらくは、それが巻一から巻九で終っていることである。本文行間の書入は主として、本文の校合であり、これはおびただしい数にのぼる。それ以外に、頭書が（貼紙に記したものもふくむ）

巻一　二箇所　巻二　一三箇所
巻三　六箇所　巻四　三箇所
巻五　なし　巻六　二箇所
巻七　七箇所　巻八　一二箇所
巻九　三箇所　合計四八箇所

存する。これは（一）本文に関するもの、（二）注釈に関するもの、（三）その他、があって興味深いものである。

蔵書印は、小沢正夫博士によって紹介された岩瀬文庫の高尚旧蔵書入「紫式部日記傍註」に押されている「松乃や蔵書」という五字を二行に彫った印と同じものであり、[注四] 巻一から巻四までは第一丁表の右下

に、巻五は第一丁右下と終の第二十八丁裏の左下に、巻六は最初になく終の二十四丁裏の左下に、巻七と巻八とは第一丁表の右下に、巻九は終の三十丁裏の左下に、巻十は第一丁表の右下に、巻十一と巻十二とはいずれも終のそれぞれ二十六丁裏と二十四丁裏の左下に押されている。なお、巻一の裏表紙見返し左上部には、小さく墨書で、「松乃屋」の文字が見える。

以上の蔵書印その他から推して、これが藤井高尚の旧蔵書であったことはまちがいないが、その筆蹟に関しても、架蔵の高尚の短冊や、田中博士ご所蔵の手紙、掛軸の文字とも照合して、高尚自筆であることは断定できる。なお、書入のところどころに「高尚」とか、「高尚云」「高尚釈」の文字があるのであるが、それと、架蔵短冊の署名とを比較しても、まちがいないようである。

また、高尚の研究家であり、その自筆の文献を数々蔵しておられる、吉備津神社宮司、藤井孝氏にも見ていただいたが、高尚自筆であることは疑いないとの事であった。

次に、田中博士蔵高尚自筆書入春曙抄（以下この本のことを、かりに田中本と略称する）と、岸上本、ならびに枕冊子新釈の「春は　あけぼの」の段の本文の一部を示し、参考に供しよう。

○田中博士蔵　高尚自筆書入春曙抄（春曙抄の頭注・傍注は一切省略した。）

春はあけぼの。空はいたく霞みたるに異本やう〳〵しろくなりゆく、山ぎは。の異すこし。つゝ異あかりて、むらさきだちたる雲のほそくたなびきたる。夏はよる。月のころはさらなり。やみもなをほたるとびちがひたる。雨などのふるさへおかし。秋は夕ぐれ。夕日はなやかにさして、山ぎはいとちかくなりたるに烏のねどころへゆくとて、みつよつふたつなンどとびゆくさへあはれなり。まいて鴈などのつらねたるのおほくとび異がいとちいさくみゆるいとおかし。日いりはてゝ、風のをと虫のねなンどいとあはれなり。

○岸上博士蔵　高尚書写枕冊子

春はあけぼのやう〳〵しろくなりゆく山きはすこしあかりてむらさきたちたる雲のほそくたなひきたる　夏はよる月のころはさらなりやみもなほほたるとひちかひたる△あめなとのふるさへをかし　秋は夕くれ夕日はなやかにさして山きはいとちかくなりたるにからすのねところへゆくとて三つ四つふたつなンどとひゆくさへあはれなりまいてかりなとのつらねたるかいとちひさく見ゆるいとをかし日いりはてゝ風のおとむしのねなといと。あはれなり

〔頭注〕△またたゝひとつふたつなとほのかにうちひかりてゆくもをかしイ
震本　ほたるおほくとひちかひたる又たゝ一二なとほのかにゆくもいとをかし　雨のとかにふりたるさへこそをかしけれ
○むしのこゑはたいふへきにもあらすめてたし

○枕冊子新釈　本文

春はあけぼの。そらはいたく霞みたるに。やう〳〵しろくなりゆく山きはのすこしつゝあかみて、むらさきたちたる雲のほそくたなひきたる、などいとおかし。夏はよる。月のころはさらなり。やみもなほほたるのおほくとびちがひたる、又たゞひとつふたつなどほのかにうちひかりてゆくもおかし。雨のどやかにふりたるさへこそおかしけれ。

秋は夕ぐれ。ゆふ日のはなやかにさして、山のはいと近くなりたるに、からすのねどころへゆくとて、みつよつふたつなど、とびいそぐさへあはれなり。まして鴈のおほくとびつらねたるがいとちひさく見ゆるはいとおかし。日いりはてゝ風のおと虫の音などいとあはれなり。

以上を通覧するに、右に引用した箇所に関しては、岸上本の書入はすこぶる詳密であり、田中本の方は少く、その要をとったかの感がある。だが、全体的にみると、岸上本は第一冊と第二冊（春曙抄巻五までに相当する）まではくわしい書入がなされ、三冊以下になるとまったく少くなる。田中本の方は、前述のごとく巻九までではあるが、むしろ巻が進むにつれて、ここに示した部分よりも多いぐらいに、ほぼ同一程度の書入が施されているのである。ただ本文校合の態度は、両本ともすこぶる恣意的、主観的であって、例えば「雨などふるさへをかし」のところは、三巻本（古本）によると「雨などふるもをかし」であるが、堺本の本文は岸上本の頭注に見えるが、三巻本のそれは、まったく触れられていないのである。したがって、これを厳密な校本として利用することはできない。このような校訂方法による新釈の本文は、高尚の文章観が生んだ諸系統本の混淆本文であって、今日からみると、本文としての資料的価値はほとんどないといってよい。

さて、この三者の関係については、これを軽々しく論ずることはむずかしい。すなわち、岸上本と新釈とでは、新釈が後に成ったものであろうことは確実であり、岸上本と田中本とでは、いずれが先であるかはこれまたむずかしい。岸上本は、文化元年九月八日の日付を持つ序がついているから問題はないが、何の日付もない田中本はそれ以前の、すなわち、高尚の枕冊子研究の初期の書入とみるか、岸上本以後の、研究が相当進んできてからのものとみるかは、にわかに断定を下しがたい。ただ、次のようなことだけはいえるではなかろうか。

(1) 田中本の書入は巻九で中絶しているものの、全体が墨書で、しかも書体は端正であり、一旦記した書入の訂正もいちいち小さな紙片を貼って体裁よく行なっている。これは何かの基礎資料（下書）をもとにして、ていねいに浄書したもののようである。（これは本文校合の書入においてとくにそのことがいえる。）

(2) 「枕冊子新釈」が最初五冊の計画であったものが（岸上本は五冊）後に十二冊の春曙抄の巻数に従うこととなったことから（現存「枕冊子新釈　一」は春曙抄の巻一に相当する）、高尚の枕冊子研究が、「三のしるべ文下」の記載などによっても、春曙抄を基として進められていったものと考えられる。

(3) 晩年の清水宣昭宛の消息に、「枕冊子春曙抄補正」の名が見え、春曙抄の説を補い正す書入本か、または、著述が用意されていたらしいことが想像される。

以上の諸点を考え合せてみると、岸上本が高尚の枕冊子研究における初期の本文を中心とした覚書のようであり、田中本の方が、おそらくそれらを基にして、主として本文校合の整備をなし、さらに注釈などの見解を加えたりしようとしたものと見てよいのではなかろうか。

三

さて、次に田中本の書入について若干の考察を試みたいと思う。

その書入は先にも述べたごとく、形式的には(一)行間へ傍注式に施したものと、(二)欄外に頭注式に施したもの、(三)紙片に一往の見解を記し、今後の研究に資したもの、とに分けられ、内容的には(一)本文に関する書入と(二)注釈その他に関する書入とに大別できる。行間の書入は本文に関する校合がほとんどすべてであり、春曙抄本文をミセケチにして、あらたに本文を掲げ、「古」「異」「活」「延徳」などとその拠った本の名が明記されている。欄外に頭書されたり、紙片に記されているものは、注釈に関するものが多く、清水浜臣の注を継承しているところもあり、大橋長広に問合せたとしているところもあり[注五]、高尚自身の見解も「高尚考」「高尚云」「高尚釈」[注六]として簡明に記している。また行間に書ききれなかった本文校合にも及んでいる。

ところで、今は紙幅の関係もあるので、分量的にもその大半をしめる。本文に関する書入について考えていきたい。注釈その他に関するそれについては機会をあらためて報告することにしたい。

本文に関する書入において、使用されている略号には「古」「一本」「異」「活」「延徳」があり、まま、高尚の本文についての意見を示したと思われる「高尚」の文字が見られる。

「古」は、古本の義であるが、先に掲げた第一段の一部の校合からみても(一五頁参照)、三巻本系統本のそれであることはいうをまたない。そしてその数はおびただしく、全数二四二五をかぞえる。すなわち巻別これをに示すと、

巻一	一五七箇所	巻二	二九七箇所
巻三	二九七箇所	巻四	三三八箇所
巻五	二四一箇所	巻六	三〇七箇所
巻七	二七三箇所	巻八	二五八箇所
巻九	二五七箇所		

合計二四二五箇所

のごとくである。しからば、一類本か二類本かというに、両類の異同の多い「あつげなるもの」「はづかしきもの」「むとくなるもの」などの諸段の中から、若干その例を拾ってみると、

○六七月ずほうのあざり、日中の時などをこなふ。又おなし比の銅のかち。

一類本――六七月のすほうの日中の時をこなふあさり

二類本――七月のすほうのあさり日中の時なとおこなふいかにあつからんと思ひやる

(あつげなるもの巻六・二十三オ10岩波文庫春曙抄一〇九段校本一二七段2)

(傍線の部分の三巻本一類および同二類の本文を示した。所拠本文はいずれも「校本枕冊子」によっている。以下同じ。)

○はづかしきもの　おとこのこゝろのうち。

一類本――おとこの心のうち

二類本――色このむおとこのこゝろのうち

(はづかしきもの巻六・二十三ウ2岩波文庫一一〇段校本一二八段1)

○さしむかひたる人をすかし。たのむることそはづかしけれ。（ほとはうち古　ておもはぬ事をもいひ古　きわさな古）

（同巻六・二十四オ7岩波文庫一一〇段校本一二八段9）

一類本――さしむかひたる人をすかしたのむることそいとはつかしけれ

二類本――さしむかひたる程はうちすかして思はぬことをもいひたのむることそはつかしきわさなれ

○必尋ねさはがん物（そ古）をと思ひたるに、さしも思ひたらず（あ古）、ねたげにも（のとか古）てなしたるに（れは古）、

（むとくなるもの巻七・一オ9岩波文庫一一一段校本一二九段6）

一類本――ねたけにもてなしたるに

二類本――のとかにてもてなしたれは

のごとくであって、これ以外にも、一類本本文の存しない「あはれなるもの」の段の「二十六七日はかりのあかつきに」以下に（巻六　十五ウ）に「古」として二類本本文の克明な校合がみられることからも、三巻本二類系統本文の校合であることは明確である。

次に「一本」は、巻一に五箇所、巻二に一箇所、計六箇所あって、その一つをあげると、

○あなゆゝし。（さらに一本）○さるものなしといはすれば、

（うへにさふらふ御ねこは巻一・十五オ5岩波文庫七段校本七段44）

三巻本――あなゆゝしさらにさる物なしといはすれは

能因本――あなゆゝしさるものなしといはすれは

とあって、三巻本に一致し、以下四例も、三巻本である。ただ巻二の「すさましきもの」の段（一オ岩波文庫二一段校本二三段1）の「春のあしろ」の次に小さく「しはすの扇一本」とあるものは、三巻本をはじめ古写本類にかかる本文はなく、盤斎抄の本文をとったものであろう。[注七] いずれにしても、「一本」はその例が少いため、たしかなことはいえないが、岸上本の見返しに記された「古一本」（三巻本系の一本の意）と、一往みてよいのではなかろうか。

「異」は異本の意で、第一段の一部の飜刻（一五頁）によっても明らかなように、大体において堺本系統本文をさすようである。その校合数は

巻一　三六箇所　巻二　一二箇所

巻三　二六箇所　巻四　七箇所

巻五　五箇所　巻六、七、八　なし

計八六箇所（巻一にはさらに頭注に一箇所ある）

のごとくであって、巻一、二、三に多く、巻が進むにつれて、ほとんどとりあげられていない。

そもそも、江戸時代の国学者の本文校合態度というものは、今日の文献学的立場からみると、問題が多い。その校合というのも、大抵の場合、全部の異同が明示されていることは稀で、採択するに一理ありと思った場合とか、自己の文章観にかなった箇所は大いに採り入れ、そうでない場合は捨ててゆくといった、すこぶる主観的方法なのである。したがって、高尚の場合も同様で、前にも少し触れたように、厳密な校本としての価値は少いが、反面、その学者の、その本およびその本文への見方――むしろ感じ方といった方がよいかもしれない――といったようなものは或程度窺えるものと思う。高尚が、最初巻一で堺本本文を大量に採り入れる方針をとっていたものが、次第に減り、

巻が進むにつれて、ほとんど採用していないという点は、興味あることといえそうである。それに対して、古本、すなわち、三巻本本文の校合に関しては逆の現象がみられ、巻一は一五七箇所と比較的少いが巻二以下は、二九七箇所（巻三も同数）、巻四は三三八箇所、巻五は二四一箇所と、巻九までではあるが、平均して各巻二八四の校合数がみられるのである。そして頭注にも「古本きえてヨリおはし云々ヘツヽクイトヨシ」（すさましきもの巻二・一ウ）、「古本ころもをきてトツヽクイトヨシ」（職の御曹司におはします頃巻四・二十ウ）などの書入がみられ、ここに文章家としての高尚の三巻本本文に対する評価というものを見出すこともできようかと思う。

「活」は、古活字本のことであろう。その校合は、巻四から巻九（巻六をのぞく）に及ぶが、その数は少い。すなわち、

巻四　四箇所　　巻五　七箇所
巻七　一箇所　　巻八　一箇所
巻九　一箇所

計　一四箇所

である。古活字本中、何行本によったかは、

○ひるなどもたゆまず心づかひせらる。夜はたまして、（古本「れ」、活「ナシ」）
（内の局は巻四・一ウ12岩波文庫六四段校本七八段5）

能因本――心つかひせらる（十三行古活字本「心つかひせられ」）

○冬は火おけに、やをらたつるひばしのをとも、しのびたれど、（活「ナシ」）
（内の局は巻四・二オ10岩波文庫六四段校本七八段12）

能因本――をとも（音も）（十三行古活字本「をと」）

などから判断して、十三行古活字本によったものとしてよいであろう。

ところで、次に「延徳」すなわち「延徳本」にうつろう。

延徳本という本は、岸上本の見返しに、高尚の自筆で、その由来が略記せられていることは、先にあげたとおりであるが（一一頁）、はたしてどのような系統の本なのであろうか。武藤元信の「枕草紙通釈上巻」の清少納言枕草紙異本大概の六古本のところに、

「……わが蔵本（是は延徳写本の写にて、第一冊のみあり）これらは缺本也。」

（同書　四頁）

とだけ書かれ、また「二月晦日、風いたくふきて」の注に、

「○左兵衛督　古本（延徳本並那佐本）の脇書（筆者注、勘物のこと）によれば藤原実成なり。……」

（同書上巻四〇〇頁）

とあって、[注八] 武藤氏がその写本を蔵しておられたことや、勘物の付せられている古本（三巻本）系統の一本であるらしいことが判明する。だが、ただいまのところ、この写本がその後どうなったかは不明である。

そもそも、延徳年間といえば、一四八九年八月二十一日から一四九二年七月十八日までのことであり、（日本歴史大辞典の年表による。）中でも延徳二年は足利義政の没した年で、銀閣寺建立に象徴される東山文化のはなやかなりし頃なのである。一方、文学の面においても、宗祇らの水無瀬三吟百韻が詠まれ（長享二年（一四八八）、三条西実隆や東常縁が活躍するなど、応仁の乱後における古典研究の盛んになった一時期であった。方丈記やつれづれ草の写本にも、延徳本というのがあり、

ともに延徳二年の年号を有するものが、前者（東京帝国大学国語研究室旧蔵―震災で焼失）は長連恒氏らによって、珍書同好会から刊行され（大正四年八月）後者（竜谷大学図書館蔵）は、吉沢義則博士らによって、「異本つれ〴〵草」（昭和六年八月、立命館出版部刊）などに校合紹介せられているが、枕冊子にも、延徳年間書写本というのがあっても、一向不思議ではないのである。もしも、この本がほんとうにその年に書写されたものか、あるいはそれの忠実な転写本であったとすれば、書写年代の明らかな写本として、本文の系統はともあれ、尊重されるべきものであろう。その筆者は三井寺正般というのであるが、正般は正徹の門人で、寛正ごろ（一四六〇～一四六六）の人といわれる。（「読史備要」名字索引による）所蔵者だった亀山直綱は「藤井高尚伝」によると、高尚の友人で、備中八田部の里の素封家とのことであり、「青松社の記」（吉備津神社蔵「藤井高尚文稿」（未刊）所収）は高尚が直綱のために書いた一文という。（同書二一七ページ）

高尚は、はやくこの延徳本を直綱から借覧していたらしく、文化元年九月の序を有する岸上本には、主として三冊目ぐらいまで、ところどころ朱書で校合し、田中本春曙抄にも墨書で校合している。また、枕冊子新釈には、現存本は巻一だけであるが、二十三箇所にわたってその本文を示している。今は田中本春曙抄を中心として、延徳本の性格の概略といったようなものを、できるかぎりさぐってみたいと思うのである。

「延徳本」「延徳」「延」という校合書入は、（「延徳本」書入のすべては、末尾に通し番号をつけて示した）[注九]

巻一　一二箇所　巻二　五箇所
巻四　四箇所　巻五　九箇所
巻六　三箇所　巻七　二箇所
計　三五箇所

存する。そして巻七の「七日の若菜を」の段（五ウ　岩波文庫一一六段　校本一三四段）の上部欄外には、「延徳本ハコヽマデアリテ此次ナシ」と記されており三巻本系統諸本の上巻にあたる部分の存したことがわかるのである。そして先の武藤元信蔵の延徳本が第一冊目だけの闕本の由であるが、高尚の見た本もこれと同じく、上巻だけの一冊本のように思われる。

かくて、延徳本は形態的に三巻本系統の一本たること、疑いを入れないのであるが、これを古本あるいは古本中の一本としていないのはどういうことによるのであろうか。延徳二年の書写とする記載の存するためであるのは勿論であるが、一冊だけの闕本によるという形式的なこともさることながら、やはりその本文の質によるものなのであろうか。高尚の延徳本書入は、巻一の「春はあけぼの」の段（岩波文庫一段　校本一段）から、岸上本には存し、田中本春曙抄には「正月一日は」の段（岩波文庫三段　校本三段）に初めて出るが、以下部分的、任意選択的であるにもせよ、巻七の「七日の若菜を」の段（岩波文庫一一六段　校本一三四段）まで書入れられており、もし、延徳本の本文が純正な本文を伝えているとすれば、現在その伝来の明かでない三巻本一類の欠損部分を、何らかの意味で補正しうる示唆を与えてくれないかということも、想像できるであろう。

周知のように、現存枕冊子三巻本系統第一類の諸本は、「春はあけぼの」の段から「あぢきなきもの」の段（七五段、三巻本の段数は日本古典全書（改訂版）による。以下同じ）までを闕き、勧修家本、岩瀬文庫本、中邨秋香本などは、上巻すなわち「春はあけぼの」（一段）から「七日の日の若菜を」（一二六段）までは二類本系統本文、中巻すなわち「二月官の司に」（一二七段）以下、下巻の終までが、一類本系統本文であるから、もし延徳本による「ここちよげなるもの」（七六段）から「七日の日の若菜を」（一二六段）までの諸段の校合書入が、一類本系統本文の要素があったとすると、前半の「春はあけぼの」（一段）から「あぢきなきもの」（七五段）までの諸段も、或いは一類本系統本文の要素をとどめているとも考えられるのであって、この検討は十分意義あることとなるであろう。

そこでまず現存三巻本一類の上巻「ここちよげなるもの」（七六段）以下「七日の日の若菜を」の段（一二六段）までの諸段の校合書入を検討してみよう。

その間の延徳本の校合書入は、十七箇所存するが、（末尾注九に示した19から35にあたるのが、それである。以下この番号を使用して示す）とくに先にもあげた「延徳本ハコヽマデアリテ此次ナシ」と頭書している「七日の若菜を」の段（巻七・五ウ岩波文庫一一六段校本一三四段）のあたりの校合は重要な意味を持っている。それは三巻本上巻末尾の数行を、二類本系統諸本はいずれも脱しているからである。

34又おかしげなる菊の生。たる（出延）をもてきたれば、

(イ)

35いはまほしけれと聞（ロ）いるべくもあらず。

又これも延

（七日の若菜を　巻七・五ウ岩波文庫一一六段校本一三四段4・7）

傍線(イ)(ロ)のところは

(イ)三巻本一類――おひいてたる（能因本の主底本も同じ）

(ロ)三巻本一類――又これもきゝいる（能因本「又これも」ナシ）

とあって、三巻本主底本の陽（校異および諸本略号は校本枕冊子に従う。以下同じ。）に一致し、一類本にはいずれも異文がないから、この箇所に関するかぎり、三巻本一類の要素をもっているのではないかと思われる。なお、前田家本・堺本はこの段を存しない。さらに

21それはあいなしとてかき捨（古ナシ）（すて）よなどおほせごと侍しかと申せば（古ナシ）（よ延）

（職の御曹司におはします頃、西の廂に　巻四・三一ウ岩波文庫七六段校本九一段14）

傍線のところは、

三巻本一類――仰せ事侍しよと

能因本――さふらひしと

前田本・堺本――コノ段ナシ

であって、「侍しよ」の部分は二類本系統いずれも「侍しか」で、延徳本は三巻本一類（陽・宮・明）に一致するといえる。また

22～24たつの日の。あ（よ延）をすりのからきぬかさみを。きせ（みな延）。給（させ延）へり。

（宮の五節出させ給ふに　巻五・五ウ岩波文庫七九段校本九四段4）

の全文は

三巻本一類――たつの日の夜あをすりの唐きぬかさみを皆きせさせ給へり

能因本――辰の日の・あをすりのからきぬかさみを・きせさせ給へり

前田本――たつの日の夜あをすりのもからきぬかさみをみなきせ給へり

堺本――コノ段ナシ

とあって、三巻本二類は「たつの日の……かさみを皆」まで**龍**以下、**弥**（小書 書キコミス）をのぞいては、脱しているから、ここにおいても、一類本本文に近いものを有しているといってよかろう。

25 うす（は延）こほりあはにむすべるひもなればかざす日かげにゆるぶばかりを

（宮の五節出させ給ふに　巻五・七ウ　岩波文庫七九段　校本九四段26）

の傍線のところは、

三巻本一類（**陽**）――うは氷
能因本――うす氷
前田本――うすこほり
堺本――コノ段ナシ

であって、さらに三巻本内部でも異同が多い。

宮・明・龍――うはこほり
弥――よはこほり
刈・内――あはこほり
勧・伊・静――かはこほりの
中――河（いうす）こほり
古――よはこほり

とあって、延徳本の本文は、一類系の**陽・宮・明**と一致し、一類本に近い**龍**とも一致するのである。

ここに示さなかった各項についても、同様の調査を試み、あわせて分類してみると、次のごとくである。

（一）三巻本一類（**陽・宮・明**）と一致するもの九例（参考二例）

21・22・23・24・25（**龍**とも一致）・26・28・34・35

32は延徳本「つほね〳〵にたてゝ」で
三巻本一類「局に局たてゝ」
三巻本二類「つほねにたてゝ」

とあって一類本に近い。

33は延徳本「さしぬきわたのいりたる」とよまれ、
三巻本一類「さしぬきのわたいりたる」
三巻本二類「さしぬきにわた入たる」

とあって、どちらかいえば一類本に近いことになるであろう。

（二）三巻本一類および二類本の大部分と一致するもの　三例

19（**古**「はつ雪の」でそれ以外と一致）
29（**伊・静**「いそかしく」でこれら以外と一致）
31（**龍**「まて」**弥・刈・内**ナシ、これら以外と一致）

（三）独自異文　三例

20・27・30（ただし、能因本系統富岡本に「ゑぬ。（たき）」とある）

以上のように、二三の問題はあるようだが、一往、延徳本は三巻本系統一類の本文の要素を多分に持っているものと考えてよさそうである。

そうなると、右に取上げなかった1から18までの校合本文中にも、或いは今日みることのできない三巻本一類の本文のおもかげが、或程度窺えはしないかということも考えられるであろう。一類本本文の上巻前半が伝わらないため、その特徴的な面を指摘することは至難であるが、ともかく、二類本本文と一致するか、一致しないかを右にならって分類してみよう。

(一)三巻本二類の本文と一致するもの

(1)二類本諸本（校本所収の）と一致するもの　九例

5・7・8・9・11・13・14・16・18

(2)二類本中数本と一致するもの　五例

6（勧・中・伊・古と一致）

10（内「けによう」をのぞく諸本と一致）

12（勧・中・伊・古・内と一致）

15（古・内「あら〳〵」以外と一致）

17（内「みゆる」以外と一致）

(二)三巻本二類の本文と一致しないもの　四例

1（前田本・堺本は「つくろひたてゝ」とする近似の本文である）

2（前田本・堺本と一致）

3（弥・勧・中は異本校合として「はた」（さイ）とある）

4（校本枕冊子　に見える諸本にはいずれもみられない）

となって、おおむね、現存三巻本二類と同じであるが、四例の一致しないところもあって、（今は省略するが、枕冊子新釈所引の延徳本本文によると、さらにもう二例加えることができる）[注十]その中でも、1・2のごときは、それを堺本系統本の影響によるものとみるか、一類本のおもかげが存しているとみるかは、なかなかむずかしい。高尚の本文校合の方法が、網羅式でなく、主観的、任意選択的であるため、これ以上の臆測は許されまい。それにしても、二類本と不一致の箇所が、いくつか存するということや、延徳本が一類本欠損箇所を、すべて二類本ばかりで補ったものでもなさそうであることを、ここに指摘しておいてよかろうと思う。

ところで、延徳本の書入は、先にも触れたように、これ以外に、岸上本にも存するし、枕冊子新釈にも引かれているから、さらにこれらを綜合し検討を加える必要があるであろう。今は、田中本春曙抄の書入を中心にこれを示し、それらの調査の結果は別の機会に譲ることとした。ただし、ここに述べた、延徳本に三巻本一類的要素が多分に存することは、岸上本の校合書入によっても[注十一]、新釈の所引によっても、いえることであり、しかも、そのいくつかが、岡田真氏旧蔵の「永禄元年以前書写枕冊子断簡」（校本枕冊子附巻所収）[注十二]の本文にも一致するところがあって興味深い。ただ本文の純粋性如何ということ、校合途上における誤謬、誤脱が生じてはいけないかということ、その他校合態度が厳密な校本を作成するという意図のもとになされたものでないことなど、若干の問題が存する点を考慮しなければならないであろう。

なお、枕冊子抜書本本文に、三巻本一類の面影が窺えることは、楠道隆氏をはじめ先学によって指摘せられているが、田中本春曙抄の延徳本書入の箇所に対応するところがなく、それをたしかめることはできなかった。

要するに、延徳本は現存枕冊子三巻本の上巻に該当する闕本らしく、その本文には若干不純な要素もないではないが、三巻本一類の要素も多分に有し、現存一類本の欠損箇所を窺い得る興味深い古写本のようである。かくして、藤井高尚は、古本――三巻本二類――と区別してこれを校合したものであろう。今その所在を明かにし得ないのは、まことに遺憾の極であるが、武藤元信翁がその写本を所持しておられたのであるから、必ずどこかに存するのではないかと思う。

さて、最後に「高尚」「高尚云」と記した。高尚の推測批判にもとづく本文校訂が示されている箇所は、

巻一　八箇所　巻二　七箇所
巻三　七箇所　巻四　三箇所
巻五　八箇所　巻七　一箇所
計　三四箇所

に及ぶ。いずれも高尚の苦心のあとはみられるのであるが、春曙抄本文による推測批判という点において、今日からは、その意義を高く評価することはできない。たまたま、その優れた解釈力が、その後に発見された古写本本文と一致するような場合はあっても、その多くは徒労に終っているといわざるをえないのである。いまは、春曙抄本文の誤脱を訂している一例をあげるにとどめたい。

○さう〳〵しければ○ふれ（たは高尚）あそびをし、わたどのあつまりなどしてあるに、

（ねたきもの　巻五十三ウ2　岩波文庫八三段　校本一〇〇段6）

傍線のところは

三巻本――コノアタリナシ
能因本――三・富たはふれ十・十二・十三・慶ふれ

とあって、春曙抄は、古活字本系や慶安刊本の誤脱をそのまま伝えたものであるが、高尚の推測批判によって、古写本本文の姿に復元したのである。

四

以上これを要するに、藤井高尚の枕冊子研究は、文化元年前後（四十一歳ごろ）から、没年の天保十一年（七十七歳）ごろまでの長年月にわたってなされ、現存の資料の

堀家吉次郎氏蔵　高尚自筆「枕冊子新釈　一」　一冊
岸上慎二博士蔵　高尚書写書入「枕冊子」　五冊
田中重太郎博士蔵　高尚書入「枕草子春曙抄」　十二冊（ただし九冊目まで）

から、その大要がわかるのであるが、結果的にみて、当時の本文研究の段階から、本文校訂に注がれた努力があまりにも多く、それが春曙抄本文を土台としてのそれであったために、その障害が、またあまりにも多かったといえよう。したがって、注釈における新見解を出すにしても、その所拠本文から受ける制約のために、その研究はあまり進んだとはいえなかった。しかし、本文校合を精力的に行なったことによって、ほとんど、春曙抄本文から離れようとし、それが混淆本文を創造するような結果になった点は遺憾であるが、古本すなわち、三巻本二類、延徳本すなわち、三巻本系統の一古写本かと思われる本文の優秀性に気づき、（もっとも、当時は能因本系統の古写本、前田家本はまだ世に出ず、古本と延徳本と異本と古活字本とぐらいであったが）大量にそれを校合採用しようとした点においては、春曙抄本文だけでは、枕冊子の読みが、もう限界にきたことを、高尚自ら認めていたことになるであろう。前にあげたように、古本の校合数が、他本にくらべて比較に

ならないぐらい多いことからもわかるように、文章家としての高尚の古本（三巻本）本文の評価がここによく現われていることと思う。したがって藤井高尚は、江戸末期において、枕冊子を読むにあたって、当時の流布本文にあきたらず、古写本とくに三巻本系統本文を積極的に取り入れようとした学者の有力な一人であった、とすることも許されるのではなかろうか。

ちなみに、枕冊子は高尚にとって、その注釈は未完成に終ったとはいえ、伊勢物語や古今集についで関心の深かった作品であったということもいえるであろう。すなわち、彼の他の著述においても、枕冊子のことはしばしば出てくる。例えば文化二年（一八〇五）に刊行された「消息文例」の中には、その文が数箇所引用されているし、文政十二年（一八二九）刊の「三のしるべ」中の所説は先に示したとおりである。また同年刊の「松の落葉」の中には「菊のきせわた」『長押　しきゐ』「本　さうし」の項に、いずれも枕冊子が引用せられての解説がみえ、とくに「枕さうし」のところでは、その普通名詞としての説明から、題号考のようなことにまで説き及んでいる。しかも、これらの各所や他の消息類に記されている「枕冊子」なる用字法も、「枕草子」や「枕草紙」とは書かず、かならず「枕冊子」または「清少納言枕冊子」と記しているということを付記しておきたい。

小稿をまとめるにあたって、貴重な資料の披見を許され、また数数のご示教をいただいた岸上慎二博士、高尚自筆書入「枕草子春曙抄」を貸与くださり、いろいろとご指導をいただいた田中重太郎博士に厚くお礼申しあげる。

また、藤井高尚の伝記や筆蹟の鑑定などに関して何かとご教示賜わった吉備津神社宮司藤井孝氏、藤井駿氏にも深謝申しあげたい。

注一　「藤井高尚も枕草子の註尺――――きゝおけりいまよに有やなしやその徒の人に尋まほしき事也光房ノ話」（「枕草紙存疑」（初稿本）「国語国文学研究史大成6」による。）

注二　ただ、五冊中、一、二冊までは、詳細な書入がみられ、三冊以下になると校合も書入も少くなる。

注三　高尚の年齢は、吉備津神社編「藤井高尚伝」による。日本文学大辞典その他は、宝暦五年の生れとするが、明和元年が正しいであろう。

注四　『紫式部日記釈に影響せる藤井高尚の研究』（「国語と国文学」第十五巻第七号　昭和十三年七月）参照。

注五　筆者も先年、岩瀬文庫でこの書を見る機会を得た。なお、「藤井高尚伝」（九六頁）にも、蔵書印の写真が出ている。

清水浜臣の注というのは、例えば「うたふは訟にてわらはべの国府殿に参りてうたへことする如くわけもなき事にあらそふはゑひしれたる人のさま也」（にくきもの　巻二・七オ）のごとき頭書がそれであり（岸上本にもみえる）、巻二・八ウ・十ウ・十二オ、十五オなどにも記されている。また、巻二・二十五ウや巻三・十七オは貼紙をして京都の大橋長広へ問合せている由記されている。

注六　「高尚考」四箇所、「高尚云」三箇所、「高尚釈」一箇所、計八箇所、記されている。

注七　岸上本には「しはすの扇万」と朱書せられている。

注八　この勘物は、岸上本にも「延本傍注　俊賢　長徳元年八月廿八日参議延本　左兵衛督　実成卿」と朱書（頭注）せられている。

注九　延徳本の校合箇所を通し番号をつけて、全部示せば次のごとくである。

1　すがたかたち心ことにつくろひ。君をも我身をもいはひなンどしたるさまことにおかし。（延本）

（正月一日は　巻一・二オ3　岩波文庫春曙抄三段　校本三段3・4）

2　とのもりづかさ女官などのゆきちかひたるこそおかしけれ（延徳ナシ）

（正月一日は　巻一・二ウ2　岩波文庫三段　校本三段12）

3　などてか其門。せばくつくりてすみ給ひけるぞといへば（はさ延徳）

（大進生昌が家に　巻一・八ウ5　岩波文庫六段　校本六段11・12）

4　ねこは御ふところにいれさせ給ひておのこども。めせば（を延徳）（と延徳）

（うへにさぶらふ御猫は　巻一・十二オ10　岩波文庫七段　校本七段7）

5　三四日になりぬ。ひるつかた犬のいみしくなくこゑのすれば（る延徳）

（うへにさぶらふ御猫は　巻一・十二ウ12　岩波文庫七段　校本七段15）

6・7・8　人々にもいはれてなきなど。す（などこそ人に延徳）（は延徳れ延徳）

（うへにさぶらふ御猫は　巻一・十五オ11・12　岩波文庫七段　校本七段47）

9　菊の露もこちたくそぼちおほひたるわたなどもいたくぬれ（きく）

（正月一日三月三日は　巻一・十五ウ6　岩波文庫八段　校本八段4）

10　すべてよるひる心にかゝりておぼゆるもあり。げによくおぼえず申いでられぬ事は（古ナシ）（るが）（けぎよう延徳）

11　御さうしにけうさん。してみとのごもりぬるもいとめでたしかし（さ延徳）（大古）

（清涼殿のうしとらの　巻一・二十三オ4　岩波文庫二〇段　校本二〇段45）

（清涼殿のうしとらの　巻一・二十四ウ11　岩波文庫二〇段　校本二〇段68）

12　我は三まき四まき。だにもえよみはてじとおほせらる（を延徳）

（清涼殿のうしとらの　巻一・二十五ウ4　岩波文庫二〇段　校本二〇段77）

13　人にあなづらるゝ物　家のきたをもてあまり心よきと人にしられたる人（お）（し延）

（人にあなづらるゝ物　巻二・五ウ3　岩波文庫二三段　校本二四段2）

14　かゝることはいひかひなきものゝきはにやとおもへど（ふ延徳）

（にくきもの　巻二・六ウ11　岩波文庫二四段　校本二五段15）

15・16　又やり戸なとあらくあくるもいとにくし。すこしもたぐるやうに。てあくるはなりやはする（を古）（く延徳）（し）（延徳）

（にくきもの　巻二・八オ6・7　岩波文庫二四段　校本二五段32）

17　人の門。よりわたりたるをふと見。るほどもなく過て（の前古）（や延徳）（すぎ）

（檳榔毛は　巻二・十六オ11　岩波文庫三〇段　校本三二段2）

18　其声どももみなきゝしられてそれぞかれぞといふに（り延）

（職の御曹司におはします頃　巻四・四ウ8　岩波文庫六五段　校本八〇段6）

19　ようせずはことしの初雪にもふりそひなまし（ナシ延）

（職の御曹司におはします頃、西の廂に　巻四・三十一オ3　岩波文庫七六段　校本九一段18）

20　御まへにものたまはせ人々ものたまへどなにせんにかさばかりの事をうけ給はりながら（仰られ古）（てふ古）（今延）

（職の御曹司におはします頃、西の廂に　巻四・三十一オ9　岩波文庫七六段　校本九一段142）

21　それはあいなしとてかき捨よなどおほせごと侍しかと申せば
（職の御曹司におはします頃、西の廂に　巻四・三十一ウ7　岩波文庫七六段　校本九一段147）

22・23・24　たつの日の。あをすりのからきぬかさみを。きせ。給へり
（宮の五節出させ給ふに　巻五・五ウ6・7　岩波文庫七九段　校本九四段4）

25　うすこほりあはにむすべるひもなればかざす日かげにゆるぶばかりを
（宮の五節出させ給ふに　巻五・七ウ3　岩波文庫七九段　校本九四段26）

26　うへの御まへにいなかへじといふ御ふえの候。なり
（無名といふ琵琶の御ことを　巻五・十一オ10　岩波文庫八〇段　校本九七段12）

27　わらひのゝしりて。これぬひなをせ。といふを
（ねたきもの　巻五・十四オ2　岩波文庫八三段　校本一〇〇段13）

28　このもしうこぼれ出てようい=はげしからず、あまり見ぐるしとも見つべくはあらぬに
（くちをしきもの　巻五・十八オ1　岩波文庫八六段　校本一〇三段8）

29　とくやれどいとゞいそがしくてつちみかどにきつきぬるにぞ
（五月の御精進のほど　巻五・二十一ウ1　岩波文庫八七段　校本一〇四段47）

30　はやうおほきさいの宮にゑぬたきといひて名たかきしもづかへなんありける
（はやうおほきさいの宮に　巻五・二十八オ1　岩波文庫九一段　校本一〇七段7）

31　あふ坂などをまで思ひ返したら。ばわびしからんかし
（関は　巻六・十二オ3　岩波文庫九八段　校本一一四段6）

32　たゝみなどほうとたてをくと見れば、たゞつぼねに出て犬ふせぎにすだれをさら〳〵とかくるさまなどぞ
（正月に寺にこもりたるは　巻六・十九ウ2　岩波文庫一〇六段　校本一二四段52）

33　人々しき人のをこなひたるがあをにびのさしぬきのはたばりたる
（正月に寺にこもりたるは　巻六・二十ウ1　岩波文庫一〇六段　校本一二四段65）

34・35　又おかしげなる菊の生。たるをもてきたればつめどなをみゝな草こそつれなけれあまたしあれば菊もまじれりといはまほしけれど。聞いるべくもあらず
（七日の若菜を　巻七・五ウ4・7　岩波文庫一一六段　校本一三四段4・7）

注十　「あけつとならば。延徳本にしたがふ。古本にはあけん、春本にはあけぬとあり。」（「大進生昌が家に」の段藤井高尚全集巻一、二八六頁）

「蔵人忠隆まゐりたるに。春本にしたがふ。古本には忠隆の次になりなかとあり、延徳本はなかなりとありて」（「うへに侍ふ御猫は」の段藤井高尚全集巻一、二九三頁）

注十一　例えば、岸上本の「森は」の段と「卯月のつこもりにはせてらにまうつとて」の段の間に「延本　原は云々此間に入」と朱記せられ、上欄に、「延本　原はあしたの原あはつの原しの原萩原その原」と朱書してある

注十二　注九に示した3の「などてか其門。せばくつくりて」の「門はさせはく」のところや、注十に示した「あけつとならば」のところなどは、永禄元年以前書写枕冊子断簡に一致し、三巻本二類の本文と違う。これらについて後考を待ちたい。

（本学専任講師―国文学・国語学）